中國語音韻論と漢音吳音

藤堂　明保

第一節　北京官話　Ⅰ母音系　Ⅱ韻母系　Ⅲ声母系
第二節　「中原音韻」の音系　Ⅰ母音系　Ⅱ声母系　Ⅲ声母系
第三節　中古漢語「広韻」の音系　Ⅰ序説　Ⅱ母音系
　　Ⅲ韻母系　Ⅳ声母系
第四節　上古漢語（摘録）

本稿は音韻論 phonemicis の方法を用いて中国語の音系を解釈し，併せてその結論から漢音吳音との関係を考察したものである。上古漢語（周秦漢魏），中古漢語（隋唐），古官話(宋元明の北方雅言)及近代官話の四者のうち，吳音漢音に直接関係するのは，中古漢語である。併しその本質を明にするには，近代官話及び古官話の音韻論的解釈から多くの示唆をうける。依つて紙面の許す範囲内で，まずこの二者について略述する。(音声記号は〔 〕印音韻記号は / / 印)

第一節，北京官話

Ⅰ母者系　主母音は / a, ə, u, i / の4種で，均斉のとれた配置を示す。外に半母音として，/j, w, r/ が存在する。

Ⅱ韻母系　計35韻母

	ゼロー	w-	j-	$\widehat{jw}$-
/a/	阿 a	蛙 wa	牙 ja	/
	哀 aj	歪 waj	崖 jaj	/
	奥 aw	/	要 jaw	/
	安 an	彎 wan	顔 jan	遠 $\widehat{jwan}$
	昂 aŋ	網 waŋ	羊 jaŋ	/
/ə/	餓 ə	窩 wə	/	月 $\widehat{jwə}$
	黒 əj	為 wəj	/	/
	欧 əw	/	尤 jəw	/
	恩 ən	/	/	/
	登 əŋ	/	/	/
/i/	古資 i	/	衣妻 ji	雨 $\widehat{jwi}$
	/	/	陰 jin	雲 $\widehat{jwin}$
	/	/	英 jiŋ	/
/u/	吳 u	/	/	/
	敦 un	/	/	/
	東 uŋ	/	用 juŋ	/

L, M, Hartmann 氏の解釈では，/u/ を /wi/ と解釈し従つて，主母音 /u/ を抹殺するが，それは妥当でない。(The Segmental phonemes of Peiping dialect, Language xx-No1)。詳細はいま省略する。

Ⅱ　声母系

唇　音　labials　　/$\widehat{pw}$　$\widehat{phw}$　$\widehat{fw}$　w　$\widehat{mw}$/

舌頭音	dental stops	/t th l n/
歯頭音	dental sibiants	/c ch s /
歯上音	retroflex sibilants	/c͡r ch͡r s͡r r /
舌面音	palatals	/c͡j chj s͡j j /
牙音	guttrals	/k kh h (-ŋ)/
喉音	laryngals	/· /

名称は多く中国古来の習慣に従つた。出気音の気流は /h/ の allophone と解釈する。(例えば，〔t'〕は〔tx〕であり，音韻的には /th/)。また

唇音のわたり /w/
歯上音のわたり /r/
舌面音のわたり /j/介

と解釈する。/jwr/ は昔は介母で声母とはならなかつたが，中古に /j/，古官話で /w, r/ が声母として登場し，近代官話では延 /jan/，然 /ran/，碗 /wan/ の如く，3者とも声母となりうる。漢語全体としてみると，半母音 /j, r, w/ は次の三役割をもつ，(イ) 声母のわたり。(ロ) 独立したわたり音，即ち介母。(ハ) 声母。H氏の体系では，唇音は /p/ 型であるが，これは音声的事実に反するのみか，

唇音	/p͡w……/	/w/
歯上音	/c͡r……/	/r/
舌面音	/c͡j……/	/j/

という均斉のとれた体系を成さない。またK氏が /wən/ /wəŋ/ の両韻母を認めた誤は(私の体系には此等の韻母がない) /p͡w/ 型を認めなかつたことに由来する。H氏の体系では，

/ən/ 奔盆分門跟肯痕思怎参……
/wən/ / / / / / / /温/ /

/əŋ/ 崩朋風蒙更坑恒 / 増曾……
/wəŋ/ / / / / / / /翁/ /

の如く「温，翁」が孤立する。私の体系では

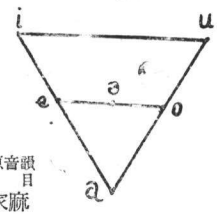
	p͡w	ph͡w	f͡w	m͡w	w	k	kh	h	·	c	ch…
/ən/	奔	盆	分	門	温	跟	肯	痕	思	怎	参…
/əŋ/	崩	朋	風	蒙	翁	更	坑	恒	/	増	曾…

の如く空欄を生じない。唇音を「仮合口」として扱うのは，中国等韻家の伝統である。

第二節 中原音韻 (1324, 周徳清) の音系

中原音韻は古官話の代表的資料で，私は始めてその音韻論的解釈を試みてみた。

I 母音系 主母音は /a e ə o u i/ の6種で，北京語に比べて /e, o/ が多い外に半母音 /j. w. r/ がある。



II 韻母系 48韻母，

	ゼロ-	w-	j-	jw	中原音韻韻目
/a/	a 巴	wa 蛙	ja 牙	/	家麻
	aj 哀	waj 歪	jaj 崖	/	皆来
	aw 奥	waw 郭	jaw 拗	/	蕭亳 1/2
	an 安	wan 彎	jan 顔	/	寒山
	aŋ 昂	waŋ 網	jaŋ 羊	jwaŋ 王	江陽
	am 暗	/	jam 黯	/	監咸

/o/	o 阿	wo 窩	jo 約	/	歌戈
	/	won 碗	/	/	桓歓
/ə/	əj 黒	wəj 為	/	/	斉微 1/2
	əw 欧	/	jəw 尤	/	尤候
	ən 恩	wən 敦	jən 陰	jwən 雲	真文
	əŋ 登	wəŋ 泓(ヌ)	jəŋ 英	jwəŋ 栄(ヌ)	庚青
	əm 森	/	jəm 音	/	侵尋
/e/	/	/	je 爺	jwe 月	車遮
	/	/	jew 要	/	先天
	/	/	jen 延	jwen 遠	蕭豪 1/2
	/	/	jem 塩	/	蘆繊
/u/	u 吳	/	ju 魚	/	魚模
	uŋ 翁東	/	juŋ 用	/	東鍾
/i/	i 支資	/	ji 衣妻	/	支思斉微 1/2

古官話：北京語を比較すると，次の差がある。

(1) /aw, jam, jem, əm, jəm/ → /an, ian, ən, jin/
韻尾 /-m/ は /-n/ に合流する。

(2) /waw/→/aw/, /jwaŋ/waŋ/

(3) /wən/→/un/, /wəŋ/→/uŋ/

(4) /jan/, /jen/ → /jan/ ; /jaw/, /jew/ →/jaw/
/jam/, /jem/ → /jan/ ; /jwen/→/$\widehat{\text{jwan}}$/

主母音 /e/ は北京語では存在しなくなる。

(5) /jən/, /jəm/ →/jin/ /jəŋ/→/jiŋ/

(6) /ju/→/$\widehat{\text{jwi}}$/ jwən/→/$\widehat{\text{jwin}}$/
北京語では $\widehat{\text{jw}}$ が単一の複合フォネームとなる。

(7) /jwəŋ/, /juŋ/→juŋ/

(8) /jo/je/→/jə/ /won//wan/→/wan/
古官話の /o/ は北京語では存在しなくなる。因みに古官話の /o/ は日本の唐宋音に反映している。

中古漢語（漢音）			古官話（唐宋音）	
婆	/phwa/	バ	/pwo/	湯婆タンボ
火	/hwa/	クワ	/hwo/	火燵コタツ
緞	/thwan/	ダン	/twon/	緞子ドンス
暖	/nwan/	ナン	/nwon/	暖簾ノレン

Ⅲ 声母系

唇音	/$\widehat{\text{pw}}$氷	$\widehat{\text{phw}}$破	$\widehat{\text{Fw}}$風	W無	$\widehat{\text{mw}}$梅/
舌頭音	/t 東	th 兎	l 来		n 暖/
歯頭音	/c 早	ch 従	s 雪		/
歯上音	/$\widehat{\text{cr}}$枝	$\widehat{\text{chr}}$春	$\widehat{\text{sr}}$上	r〔児〕	/
舌面音	/$\widehat{\text{crj}}$枝	$\widehat{\text{chrj}}$春	$\widehat{\text{srj}}$上	rj〔衣〕	/
牙音	/k 見	kh 開	h 向		ŋ〔我〕/
喉音	/.〔安〕				/

漢字は藍茂の早梅詩二十声母（「韻略易通」所載）をあてはめたもの，〔 〕印内は早梅詩にないのを補つたものである。/ŋ/ は声母としては北京語に存在しないが，古官話には存在する（傲/ŋo/，

傲 /ŋaw/，仰/ŋjaŋ/ 等)。他は北京語に近似しているようであるが，実は重大な差がある。

	中古漢語	古官話	北京官話	
章	c͡jaŋ	cr͡jaŋ	cr͡aŋ	そり舌化
昌	ch͡j—	chr͡j—	chr͡aŋ	
商	s͡j—	sr͡j—	sr͡aŋ	
將	c-jaŋ	c-jaŋ	c͡jaŋ	舌面化して中和する。
鏘	ch—	ch—	ch͡jaŋ	
相	s—	s——	s͡jaŋ	
薑	kjaŋ	kjaŋ	c͡jaŋ	
羌	kh—	kh—	ch͡jaŋ	
香	h—	h——	s͡jaŋ	

中古の舌面音は北京語ではそり舌音となる。

/c͡j→cr͡j→c͡r/，即ち /r/（そり舌要素）/j/（舌面要素）を駆逐したと解釈できる。但しその為に生じた舌面音の空欄は，歯頭音，牙喉音の口蓋化により埋められる。/cj→c͡j/，/kj→c͡j/。

北京語 /ər/（児，二，耳）が生じた理由は，次の如くである。

	古官話	北京官話
I 段		→/c͡r ch͡r s͡r ər兒/
II 段	/c͡r ch͡r s͡r r兒/	→/cr chr sr rㅅ/
III 段	/cr͡j chr͡j sr͡j rj͡ㅅ/	

古官話のそり舌の程度はなお低く，II，III段に止るが，北京語では在来のIIIがIIに上る。在来のIIは当然Iに上る。この趨勢に伴い，古官話の /rj/ は /r/ となつたが，古官話の /r/ は極度のそり舌音 /ər/ となる。

/c͡j→cr͡j→c͡r/ は音声的には，〔ʧᵝ〕→〔tʃ〕→〔tʂ〕を示す。中原音韻の /cr͡j/〔tʃ〕型は，次の如き音韻論解釈によつてえられるものである。中原音韻の支思，斉微両韻間には，次の分布が存在する。

	pw…t…k	c ch s	c ch s r	č čh š ř j
支思韻	/ / / / / /	資雌思	支差師児	/ / / / /
斉微韻	篦…低…肌…	斉妻西	/ / / /	知答世日衣

支思，斉微は中世韻図の止摂であるから，その主母音を /i/ とするのが自然である。すると，

支思韻 /i/	× × ×	/ci/, /chi/, /si/
斉微韻 /ji/	/tji/, /kji/	/cji/ /chji/, /sji/

となる。次に /c/ 類：/ȩ/ 類を比較すると，/c/ ‥ /ȩ/ /ch/ : /čh/，/s/ ‥ /š/ の間の関係は全く併行している（前者は舌尖音後者はそり舌音）。而も双方共に apical sibilants であるから，/c/ がそり舌要素即ち /r/ の前において /c͡r/ となると解釈できる。

/c ch r/ 歯頭音

/c͡r ch͡r s͡r r/ 歯上音

最後に cr͡ 類と č 類とを比較すると，両者の間に補い分つ分布が存在する。（前者は /j/ のない音節に，後者は /j/ のある音節にだけ現れる）

	⁀cr	⁀chr	⁀sr	r	č	čh	š	ř	j
/i/	支	差	師	児	/	/	/	/	/
/ji/	/	/	/	/	知	管	世	日	衣
/ən/	臻	襯	莘	○	/	/	/	/	/
/jən/	/	/	/	/	真	陳	申	人	寅

両組はすべて sibilantrs であり，而も /⁀cr/ : /č/, /⁀chr/ : /čh/. /sr/ : /š/ /r/ : /ř/ の関係は並行している。(前者はそり舌音，後者は舌面音)。故に cr が /j/ の前に於て，/⁀crj/ となつて現れると解釈することができる。

/⁀cr ⁀chr ⁀sr ⁀r/ 歯上音
照 穿 審 日
/⁀crj ⁀chrj ⁀srj ⁀rj j 喩/ 舌面音

かくて我々は /⁀crj/ という形をえたが，/r/ はそり舌，/j/ は舌面の要素であるから，/crj/ は正に双方の要素を兼ねた〔tʃ〕である。中世の36字母はこの両方を「照穿審日」4母で表すが，正確には此の両組を含む。(等韻図の3等は介母 r. rj を含み4等は j を含む。中世韻図が正歯音を3等欄に配するのは，それが ⁀crj 型となつていた為である)。さて等韻家は日母を審母の濁音と解する (徐孝の「等韻図経」等)。故に

/⁀crj ⁀chrj ⁀srj ⁀rj/ は音声的には，

〔ts, tʃʻ ʃ, ʒ〕に該当する。

/⁀rj/≒〔ʒ〕であることは，特に注目を要する。

/·/ は他の子音的声母を伴わない音節 (安 /·an/ 欧/.əw/等) に現れ，北京語では glottal stop である。これは半母音 /j·r·w/ の allophone とみられる可能性もある。併し /·/ は無声ハレツ音，/j. r. w/ は有声マサツ音で，音声的性格が全く異る。中古漢語の影母が /·/ の母体で，宋初古官話で清濁区分が消失した際も /·/ は陰調に /j. w/ は陽調に入つた。中世韻図も必ず影母を独立声母として認めている。よつて私は /·/ を認め，北京語にもそれを認める必要があると思う。(Hartmann 氏が /·/ を認めないのは妥当でない。)

第三節 中古漢語 (広韻) の音系

I 序説 中古漢語の音系は従来次の材料により再構せられた。

(A) 中古の借音 (呉音，漢音，越南及び朝鮮漢語)，(B) 現代方言 (官話，英語，粤語，閩語，客家語等) (C) 隋唐の韻書の反切 (4切韻」-602，「唐韻」-751，「廣韻」-1008等)，中でも完本として「廣韻」が重視される。(D) 中世 (宋元) の韻図。中でも初期の作としては「韻鏡」及び「七音略」。(A) (B) は B. Karlgren 氏の比較方法に於て活用されたが，その材料が音声的観察に基いたため，K 氏の再構した中古音系は，音声的細目に拘泥して，有意味区分を看過した憾みがある。(C) (D) は共に何らかの音韻論的立場から編纂された重要な材料であるが，西欧の学者は東洋的思考法に熟しないため，屢々その真意を看過した。次に在来の学説の基本的欠点を列挙する。

(1) 韻図はシナ的二元論 (4=2×2 2=21×2) の原則に立つ。西欧の学者はこれを見誤つた。

			介母	主母音
呼	I 開口	I 洪音(直音)	I 内転1等	ゼロ	back
			II 外〃 2等	ゼロ	front
		II 細音(拗音)	I 内〃 3等	/r//rj/	central-middle
			II 外〃 4等	/j/	front-narrow
	II 合口	I 洪音(直音)	I 内〃 1等	/w/	back
			II 外〃 2等	/w/	front
		II 細音(拗音)	I 内〃 3等	/rw//rjw/	central-middle
			II 外〃 4等	/jw/	front-narrow

(2) Karlgren 氏も，また始めて中古漢語の音韻的解釈を試みた Somuel E. Martin 氏(「The phonemes in ancient chinese」J. A. O. S16) も，拗音3,4等の区別を看過した。3,4等を峻別する必要は，中世のあらゆる韻図に明示されて居り，朝鮮越南及びわが万葉ガナの借音からも，証明することができる。(拙稿「中古漢語の音韻的対立」—中国学会報 I)

(3) 拗音韻は次の4類に分つべきであるが，K氏は α. β. γ. の3分類を行つたのみで，而も何らその音韻論的性格にふれていない。

		介母
(イ) 純3等韻	微欣文元厳凡 (戈)	/r/
(ロ) 34等単韻	東鍾魚虞之尤陽蒸	/rj/, /j/
(ハ) 34等複韻	真仙脂支祭宥侵塩(唐)	/rj/, /j/
(ニ) 純4等韻	清幽麻	/j/

外に仮4等韻があるが，これは直音である。

(イ) はK氏の β 類，(ロ)(ハ)(ニ) は α 類，仮4等韻は γ 類にあたる。此の4類の字音は，次表の如き特色ある分布を示し，一様に取扱うことは許されない。

	唇音	牙喉音	l	そり舌音	舌面音	歯頭音
純3等韻	$\widehat{pw}$-r k-r h-r			×	×	× ×
34等単韻	3 $\widehat{pw}$-rj k-rj, h-rj		l-rj	$\widehat{tr}$j	$\widehat{cr}$j	4 $\widehat{cj}$, j c-j
34等複韻	3 $\widehat{pw}$-rj k-rj	h-rj	l-rj	$\widehat{tr}$j	$\widehat{cr}$j	× ×
	4 $\widehat{pw}$-j k-j	h-j	l-j	×	$\widehat{cj}$. j	$\widehat{c\text{-}j}$
純4等韻	$\widehat{pw}$-j k-j	h-j	l-j	×	$\widehat{cj}$. j	$\widehat{c\text{-}j}$

三種の介母の音声的性質は次の如くである。

/r/ 純3等 ≒〔i〕

/rj/ 3,4等単複韻の3等 ≒〔I〕

/j/ 3,4等単複韻の4等 ≒〔i〕

(4) K氏の γ 類は切韻時代直音であり拗音でない。併し隋唐間に4等拗音に変化したから，中世韻図で4等欄に記入する（仮4等という)。

斉 /ej/, 蕭 /ew/, 先 /en/, 青 /eŋ/, 添 /em/

仮4等直音説は，次の三点から論証される。

(イ) 広韻反切では，1,2 等と仮4等が直音反切を示し，拗音 3,4 等と異る。

1 等	寒	干，古寒切	看，苦寒切
2 等	山	間，古閑切	慳，苦閑切
仮 4 等	先	堅，古掌切	掌，苦堅切
純 3 等	元	攐，居言切	擐，丘言切
3,4等複韻	仙	甄，居延切	愆，去乾切
		/k/	/kh/

1，2等と仮4等には直音性の「古苦」を用い，他の拗音韻には拗音性の「居丘去」等を反切上字とする。

(ロ) 1,2 等と仮4等とは字音の分布が等しく，拗音韻のように拗音性字音は現れない。

	p	k	t	l	cr̂j	ĉj	j
1 寒	○	○	○	○	/	/	/
2 仙	○	○	○	○	/	/	/
仮4先	○	○	○	○	/	/	/
3,4等仙	/	/	/	/	○	○	○

故に仮4等は直音性である。

(ハ) タイ漢語では，仮4等は直音で現れる。

仮4等	堅〔ken〕	千〔sen〕…直音
3,4等複韻	軒〔kien〕	箭〔sien〕…拗音

仮4等は隋唐間に breaking の現象により純4等化する。

斉 /ej/→/jej/　蕭 /ew/→/jew/　先 /en/→/jen/

青 /eŋ/→/jeŋ/　添 /em/→/jem/

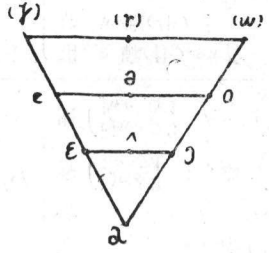
慧琳の「一切経音義」(780～810？) では，仮4等の反切上字が，居，去，丘等の拗音字をとる様に変つている。

(5) 「広韻」の反切上字には，古：居，苦：去，呼：虚，布：非等が分用される。K氏はこれを〔k〕:〔kj〕，〔kh〕:〔khj〕…等の如く解釈した。この喩化説 (Yodicized theory) は当時 /q/:/k/ (又は /k/:/c/) の如き，音韻論的対立の存した如き錯覚を与える。これは反切法が実用の工具であり，科学的分析の方法ではないことを見誤つた結果である。反切は二字音を集約して，できるだけ円滑に字音を表出しようとするから，下字が拗音であれば上字にも拗音字を，下字が直音であれば上字にも直音字を用いる。故に通説の如く上字に声母のみを，下字は韻母のみを表すとは言い切れない。かくて反切上字は下字の直音を暗示するが，さりとてそれが /k/:/kj/ の対立を示すわけではない。また譬えK氏の如く，/k/:/kj/ を認めるとしても，前者は直音，後者は拗音だけに現れて「補い合う分布」を示すから，音韻論的には /k/ を認めるだけで充分である。

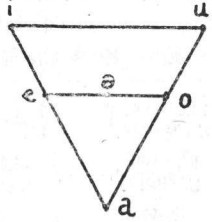
以上の修正を念頭において，中古音系を音韻論的に再構してみる。

II，母音系

中古漢語

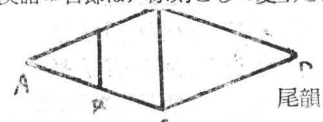


古官話



中古の主母音は，/a, ɛ, ʌ, ɔ, e, ə, o/ の7種で，古官話より /ɛ,

ʌ, ɔ/ が多い。その代り，中古には高母音 /i, u,/ がない。故に中古→中世にかけて，主母体が総体に「高くなつた」といえる。漢語の音節は，原則として菱型を成す。



尾韻　従つて（c）の主母音には，なるべく広めの母音が望ましく，原初的な姿に近ずく程，

声母　介母　主母音　/i,u/ の如き高母音は姿を消す。また介母の初頭に出たり，韻尾が閉じなかつたりする姿も，古代に溯るほど稀になる。K氏の中古音系に用いた主母音は14種であるが，私の体系では7種にすぎない。

K氏説〔u.o〕〔â ậ ă ɑ å̆〕〔ə ə̆〕〔ä ɛ ɐ̈〕〔eĕ〕

藤堂説 /ɑ/, /ɛ.ʌ.ɔ/, /ɔ.ə.o/,

中古にも半母音 /j.r.w/ がある。

Ⅲ. 韻母系

		-ゼロ	-w	-j	-m(-p)	-n(-t)	-ŋ(-k)
/ɑ/	開	ɑ歌	ɑw豪	ɑj泰	ɑm談	ɑn寒	ɑŋ唐
	合	wɑ戈	/	wɑj泰	/	wɑn桓	wɑŋ唐
	斉	/	/	/	/	/	r-jɑ ŋ陽
	撮	(rwɑ戈)	/	/	/	/	r-jwɑŋ陽
/ə/	開	/	/	əj咍	əm覃	ən痕	əŋ登
	合	/	/	wəj灰	/	wən魂	wəŋ登
	斉	/	/	(rəj微 r-jəj之	r-jəm侵	rən欣	r-jəŋ蒸
	撮	/	/	rwəj微	/	rwən文	/
/e/	開	/	ew蕭	ej斉	em添	en先	eŋ青
	合	/	/	wej斉	/	wen先	weŋ青
	斉	(rje支3 je 支4	jew幽	(rjej脂3 jej 脂4	/	(rjen真3 jen 真4	jeŋ清
	撮	(rjwe支3 jwe 支4	/	(rjwej脂3 jwej 脂4	/	(rjwen真3 jwen 真4	jweŋ清
/ɛ/	開	ɛ 麻(佳)	ɛw肴	ɛj夬(佳)	ɛm銜	ɛn删	ɛŋ唐
	合	wɛ麻(佳)	/	wɛj夬(佳)	/	wɛn删	wɛŋ唐
	斉	je 麻4	(rjɛw3宵 jew 4宵	(rjɛj3祭 jej 4祭	(rjɛm塩 jem 塩	(rjɛn3仙 jwɛn 仙	rjwɛŋ唐
	撮	/	/	(cjwɛj3祭 jwɛj 4祭	/	(rjwɛn仙 jwɛn 仙	rjwɛŋ唐
/ʌ/	開	/	/	ʌj皆	ʌm咸	ʌn山	ʌŋ耕
	合	/	/	wʌj皆	/	wʌn山	wʌŋ耕
	斉	/	/	rʌj廃	rʌm厳	rʌn元	/
	廃	/	/	rwʌj廢	rwʌm凡	rwʌn元	/
/o/	開	o模	ow侯	/	/	/	oŋ東
	合	/	/	/	/	/	woŋ冬
	斉	r-jo魚	r-jow尤	/	/	/	r-joŋ東
	撮	r-jwo虞	/	/	/	/	r-jwoŋ鍾
/ɔ/	開	/	/	/	/	/	ɔŋ江
	合	/	/	/	/	/	/
	斉	/	/	/	/	/	/
	撮	/	/	/	/	/	/

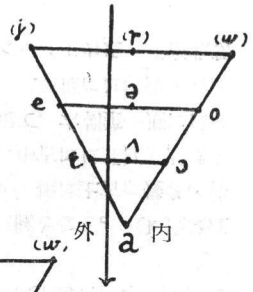
/rəj/ 微の如きは純3等，(rje3支 / je 4支 の如きは3,4等複韻，/r-jəj/ 之の如きは3,4等単韻（唇牙喉音，歯上，舌上音は /rjəj/ 舌面音は /jəj/ を表わす。以下本表の説明を略記する。

(1) 主母音と介母の間には次の関係がある。

主母音	介母		
/ʌ/，/ə/ $\frac{1}{2}$	/r/	/rw/	純3等
/e/ /ɛ/	/rj/	/rjw/ 3	3,4等複韻
	/j/	/jw/ 4	
/a/，/o/，/ə/ $\frac{1}{2}$	/rj/	/rjw/ 3	3,4等単韻
	/j/	/jw/ 4	

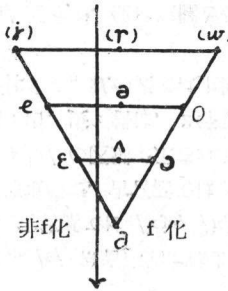
(2) 内転（back）：外転（front）は右図の如く区分される。

但し江 /ɔŋ/ は隋唐間に /ɛŋ/ /aŋ/ に転じ，皆/ɛj/，山/ɛn/，咸 /ɛm/ 等も /ɛj, ɛn, ɛm/ に転入するから，中世の韻図では外転に入る。



(3) 軽唇化（f）は介母 /r, rj/ を伴う外，主母音に次の條件を必要とする。

初歩の軽唇化（φ化）は，唐の慧琳「一切経音義」に著しい。



(4) 直音韻1等：2等：仮4等の区別は次の原則による。

1等 /a.o.ə/，2等 /ɛ.ɔ.ʌ/，仮4等 /e/

故に2等母音は常に中間音である。

/$ɛ_2$/……/a_1/～/e_4/ の中間音

/$ɔ_2$/……/a_1/～/o_1/ の中間音

/$ʌ_2$/……/a_1/～/$ə_1$/ の中間音

従つて音韻論的には，2等韻は常に「弛み音」(記号∨印）であり，弛み要素≒/r/ と解釈すると，そり舌音が2等韻に生じた理由を説明できる。例えば

上古	中古	上古	中古
/ǎn/→/ɛn/（删）		/ə̌n/→/ʌn/（山）	
/ěg/→/ɛj/(佳夬)		/ŏŋ/→/ɔŋ/（江）等	
/cǎn/→/c^rɛn/→/$\widehat{cr}$ɛn/（歯上音）			
/tĕg/→/$\widehat{t^r}$ɛj/→/$\widehat{tr}$ɛj/（舌上音）			

（詳細は声母の項参照）

(5) 歌1：麻2，豪1：肴2，泰1：夬2，談1：銜2，寒1：删2等は，中古の有力方言では，〔ɑ〕：〔a〕の対立で現れた。併し音韻的には，/a/：/ɛ/ と解釈するを妨げない。而も

呉音 {1 歌カ 高カウ 干カン 甘カム
　　 {2 家ケ 支ケウ 姦ケン 塩ケム

等の区別は，この解釈により一そう明白である。

{1 歌/a/，豪/aw/，泰/aj/，談/am/，寒/an/
{2 麻/ɛ/，肴/ɛw/，夬/ɛj/，銜/ɛm/，删/ɛn/

併し直音 /ɛw/（肴）：拗音 /jɛw/（宵4）とでは，同じ/ɛ/

の音彩が違う。(jの後の /ɛ/ は音声的にはより狭い)。/kɛ/ /kɛw/…(牙喉音)は，古官話では /kja/ /kjaw/…となる。

(6) 哈：泰，談：覃は1等重韻で，古官話では /a-/ に合体する。私の表では主母音 /ə/：/a/ の区別で示される。

(7) 夬：皆，銜：咸，删：山，庚：耕は，2等重韻である。唐代泰音雅言では両者は合体する。私の表では主母音 /ɛ/：/ʌ/ で示される 。

(8) /ɔ/ 類には江韻 /ɔŋ/ だけで，他は空欄となる。(k氏は江〔ůŋ〕とする。ɑ は a～o の中間音) /ɔ/ 類は上古に幾多の仲間を擁した大きなグループであつたが，中古には「江」だけを残して消滅した。故に江も亦頗る不安定で，六朝第一期には江～東鍾が合韻しなお /ɔ/ 型であるが，二三期には唐陽と合韻するから，/ɛŋ/〔aŋ〕に変化したらしい。(王力氏－「南北朝詩人用韻考」－清華学報 11－3)

⑨ /e/ /ɛ/ 類に於ては拗音韻全部が3,4等複韻を成すのに，清・唐だけが単韻である。実は庚清が合して3,4等複韻を成すべきである。

K氏が庚を純3等（β類）とするのは誤で，庚には歯上舌上音を含む。また清は純4等で，舌面音 $\widehat{cj}$ を含むのは当然であるが外に舌上音（3等的）を含む。これらの矛盾は，唐清を併せて3,4等複韻と解すると始めて釈然とする。六朝夏侯詠の「韻略」(佚)では，唐清は一韻であつた。私の表では

庚清 { 3 /rjɛŋ/ /rjwɛŋ/
　　 { 4 /jeŋ/ /jweŋ/

と解釈するが，一応両韻に分けて記入する。

(10) 麻：佳には両韻の字が多い（媧・譁・窪等)。六朝陸徳明の「経典釈文」では，麻佳の別がない。また唐の王仁昫「刊謬補欠切韻」では，「広韻」と異り，佳は斉祭泰佳皆夬 (-j型)の系列に入らず，歌戈麻佳 (-ゼロ型)の順に並ぶ。中古の佳は方言により /ɛ/ /ɛj/ の間を浮動していたと思う。依て私の表では，麻 /ɛ/－夬 /ɛj/ (去声のみ) の次に括弧を附して佳を記入する。

(11) 仮4等は唐代に je 化して，4等拗音と合流する形勢を生じる。

仮 4 等	斉 /ej/→/jej/	先 /en/→/jen/
4等拗音	祭$_4$/jɛj/	仙$_4$/jɛn/
仮 4 等	添 /em/→/jem/	青 /eŋ/→/jeŋ/
4等拗音	塩$_4$/jɛm/	清 /jeŋ/
仮 4 等	蕭 /ew/→/jew/	
4等拗音	幽$_4$ /jew/	
	宵$_4$ /jɛw/	

(12) 南北朝詩人の押韻例では，

刪：寒/an/　桓/wan/ は合用する。

山元：痕/ən/ 魂/wən/ は合用する。

「広韻」の配列では

寒 (25)：刪 (26) は近い。

殷(21) /rən/：元 (22)：魂 (23) /wən/ 痕 (24) /ən/ は近い。

呉音では，

元は〔ön〕(建コン，言ゴン) 痕も〔ön〕(根コン) で近似している。

以上により元の主母音は /ʌ/ (ə に近い) である。

また南北朝詩人の用韻例では，

皆/ʌj/：哈/əj/ /灰wəj/ は合用する。

呉音では，哈を〔ö〕(合ト) とよむと共に，廃を〔ö〕ともよむ (穢ヲ)。山元の例に倣い，皆/ʌj/ 變/rʌj/ と定める。以下これに倣うと，次の体系をうる。

2 等　刪/ɛn/　佳夬/ɛj/　銜/ɛm/　庚/ɛŋ/

2 等　山/ʌn/　皆/ʌj/　咳/ʌm/　耕/ʌŋ/

純3等　元/rʌn/　變/rʌj/　厳/rʌm/

但し唐初に2等重韻は /ɛ/ 類に合流し，唐代秦音雅言では，元厳廃も /rʌ-/→/rɛ-/ に変り，3,4等複韻の3等に合流する形勢を生じた。(古官話では /a-/，/je-/ に分入する)

2等　刪山/ɛn/　佳夬皆/ɛj/　銜咸/ɛm/

純3等　元 /rɛn/ ｝變 /rɛj/ ｝厳 /rɛm/ ｝

3,4等複韻 ｛3仙 /rjɛn/ ｝祭 /rjɛj/ ｝塩 /rjɛm/ ｝

　　｛4仙 /rjɛn/　祭 /jɛj/　塩 /jɛm/

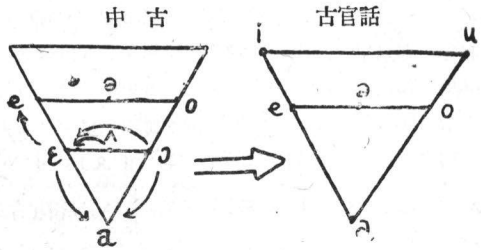
漢音はこの崩れた体系を反映する。(建コン→ケン，厳ゴム→ゲム)

(13) 中古→古官話間の主母音の簡素化は，次の経過による。

/ɔ/ の消滅 (8項)

/ʌ/ の消滅 (12項)

/ɛ/ の消滅 (5.12項)



主母音 /ɔ.ʌ.ɛ/ の消滅は，つまり2等韻母音 (弛み母音) が全部消滅したことを意味する。

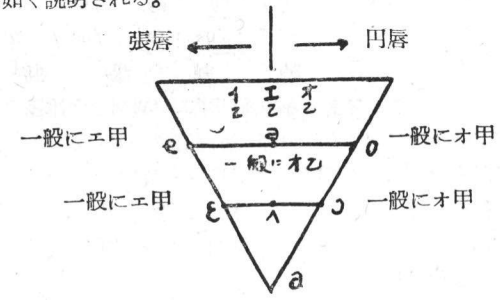
さらに，

歌/a/→/o/　桓/wan/→/won/ 等

模/o/→/u/　東/oŋ/→/uŋ/　等

支脂之微 /re. je, rjej　jej, r-jəj, rəj/→/rj ji/ 等により古官話には「高い母音」が生じてきた。

(14) 奈良朝借音におけるイ，エ，オ段の甲乙類の分用は，概ね次の如く説明される。



*/ə/ は オ乙，エ乙，イ乙，

*/o/ /oʍ/ /oŋ/ /woŋ/ 等一般に オ甲。但し魚 /rjo/ は /rj/ を含み，かつ円唇性が弱いからオ乙，これに反し，虞 /rjwo/ は /w/ を含むからオ甲。

* /aw/ 豪はオ甲。

* /e/ は一般にエ甲，但し /re-/ はエ乙イ乙，/je-/ はエ甲，イ甲。

* /ɛ/ は一般にエ甲，(/ɛj, ɛn, ɛw/ 等)。但し /rɛ-/ はエ乙，/jɛ-/ はエ甲。

* /ʌ/ は一般にオ乙 (/rʌn, rʌj, rʌm/等)。但し皆 /ʌj/，山 /ʌn/ は夙に /ɛj, ɛn/ に合流せるためエ甲。

(15) 呉音中に含む特殊な現象，即ち斉（-アイ）清青（-ヤウ）の訳音は，中古漢語の音韻表からは説明できない。切韻系以外の特異な方言的要素と解釈する外はない。

Ⅳ 声母系

唇音	pw͡ 幫 phw͡ 滂 pɦw͡ 並		mw͡ 明
舌頭音	t 端 th 透 tɦ 定		n 泥
舌上音	tr͡ 知 thr͡ 徹 tɦr͡ 澄		nr͡ 娘
	tr͡ thrj͡ tɦrj͡		nrj͡
歯頭音	c 精 ch 清 cɦ 従 s心	sh(rj)牙	
歯上音	cr͡ 莊 chr͡ 初 cɦr͡ 牀 sr͡ 疏		
	crj͡ chrj͡ cɦrj͡ scj͡		
正歯音	cj͡ 照 chj͡ 穿 cɦj͡ 神 sj͡ (hj͡) 審	shj͡(ɦj͡) 禪	tj͡ (hj͡) 日
牙音	.見 kɦ 溪 kɦ 群	j(ɦj)喩	ŋ 疑
喉音	.影 h 曉 ɦ 匣	hɦ 于	

邪審禪喩については，一次的二次的両解釈がある。中古音系自体に即していえば，一次的解釈で間に合うが，音韻史的に上古中古の対応を求めるには，二次的解釈を必要とする。

	邪	審	禪	喩
一次	/ sɦ/ ,	/s͡j ,	sɦ͡j ,	j /
二次	/ rj/ ,	/ɦ͡j ,	ɦ͡j ,	ɦj/

以下前表の解釈法を略説する。

(1) /h/ は無声気音，/ɦ/ は有声気音である。S, Martin 氏が，中古の〔t t' a'〕を，/t.th.tɦ/ と解釈したのは，今日の呉語に対応するすぐれた考えである（呉語の濁音は〔t̥ɦ, p̥ɦ, k̥ɦ〕である)。次に曉匣は，K氏が〔×, ɤ〕と考訂したが，実は中古以来南北で音声的に異る。

曉	匣	和	恵	回
南方喉音〔h〕	〔ɦ〕 呉音 ワ行	ワ	ヱ	ヱ
北方舌根音〔x〕	〔γ〕 漢音 カ行	クワ	クエイ	クワイ

故に〔X.h〕(南)：〔ɤ.h〕(北) は，音韻的には /h/ : /ɦ/ と解釈するのを妨げない。さらに無声出気音の気音を /ɦ/，有声出気音の気音を /ɦ/ の allophone とするのも，また自然な解釈である（第一節参照)。この解釈によれば，中古→古官話における清濁区分の消滅は，次の如く説明される。

/tɦa/ { 平声 →/tha/ (/ɦ/→/h/)
　　 仄声（上去入）→/ta/ (/ɦ/ は /a/に吸収)

(2) 歯頭音と歯上音

K氏以来の定説では，中古の歯上音を〔tɛ̃〕型とするが，実は〔tɛ̃〕〔tʃ〕両型を含む。

（イ） 歯頭音：歯上音（舌頭音：舌上音も同じ）は「補い合う分布」を示す。

		歯頭音	（舌頭音）	歯上音	（舌上音）
直	1 等	○	○	×	×
	2 等	×	×	○	○
	仮4等	○	○	×	×
○	3 等	×	×	○	○
	4 等	○	×	×	×

故に両者を同一音韻の allophone と解釈する可能性がある。

（ロ） もし歯上音を〔tɛ̃〕型そり舌音とすれば，

歯頭音 /c　ch　cɦ　s /

歯上音 /c͡r　c͡hr　c͡ɦr　s͡r/

となる。S. Martin 氏の解釈はこれだけで終る。併し中古→古官話→北京語の間に，下図の如き /r/ 要素の漸増がある以上，中古の莊初牀疏4母は，/c͡r/ 型より一段そり舌の程度の低い状態に在ると見ねばならない。

	中古	中世	近代
I			/c͡r c͡hr s͡r ər/
II		/cr chr sr r/	/c͡r c͡hr s͡r r/
III	/莊 初 牀 疏/	/c͡rj c͡hrj s͡rj r͡j/	
IV	/c͡j 照 c͡hj 穿 c͡ɦj 神 s͡j 審 n͡ɦj 日/		

それは正に /c͡rj/ 型〔tʃ〕である。

（ハ） 多数の歯上音が3,4等単複韻の3等(介母をもつ)に含まれる。それは当然

師 （脂韻3,4等複韻の3等） /s͡rjej/

疏 （魚韻3,4等単韻の3等） /s͡rjo/

であり，/sr/〔ʂ〕型とは解釈できない。

（ニ） 併し一方歯上音は2等直音にも含まれる。古い韻書程，「歯音類隔切」がふえ，歯上音が歯頭音に混同するし，諧声系や広韻両読の頻度率では，歯上歯頭の関係が最も近い。故に古代の歯頭音が，2等の「弛み要素」(≒r) の前に立つ時，歯上音となつたと解釈される。例；

	上古	中古	
删	/sǎn/ (=sʳ～)	→/s͡rɛn/	（删韻）
梢	/sɔ̌g/ (=sʳ～)	→/s͡rɛw/	（肴韻）

弛み要素は韻母と声母の双方に働くのである。2等は直音であるから，かくして生じた歯上音は s͡rj 型ではなく s͡r 型である。故に中古の歯上音は厳密には二類ある。

2等韻－/c͡r, c͡hr, c͡ɦr, s͡r/ 型

3等韻－/c͡rj, c͡hrj, c͡ɦrj, s͡rj/型

反切で此の両者を共に莊初莊疏4母で表わしたのは，（イ）中原音韻時代に，36字母で $\widehat{\mathrm{cr}}\mathrm{j}$ $\widehat{\mathrm{cr}}$ 両類を表したのと同様，音値が近似していること，（ロ）反切下字により直拗が区分できて混同の虞れがないことの二原因に基くと思う。唐末には $\widehat{\mathrm{cr}}\mathrm{j}$ が $\widehat{\mathrm{cr}}$ に近ずき，やがて古官話の $\widehat{\mathrm{cr}}$ となる。従つて中世の韻図では，在来の3等歯上音を2等欄にくり上げて書く。また漢音でも書 /$\widehat{\mathrm{sj}}$o/：疏 /$\widehat{\mathrm{sr}}$jo/ を，「ショ」：「ソ」で訳音する。唐末には書 /$\widehat{\mathrm{sr}}$jo/：疏 /$\widehat{\mathrm{sr}}$o/ に変化していたためと思われる。

(3) 舌頭音：舌上音

中古の舌上音を舌面音〔ʧ〕型とするK氏の説と，そり舌音〔t〕とする羅常培の説が対立したまま，今日でも未解決であるが，卑見では両説とも妥当でない。このばあいも全く歯頭音：歯上音のばあいに併行する。

（イ） 舌上音は3,4等単韻複韻に現われ，而も l- 音字を反切下字とする傾向がある。殊に唐代の慧琳「一切経音義」ではそれが徹底している。例；哲知列切，陟知力切，展知輦切，柱却楼切等。（舌上音のわたりが /l～/ に近似しているとすると，$\widehat{\mathrm{tl}}$ $\widehat{\mathrm{thl}}$……等の解釈も不可能ではない。）然るに /l/ 拗音は，/r/ ほどではないがそり舌要素を含み，/j/ ほどではないが舌面要素を含む。即ち /l/-≒/rj/ である。然らば舌上音は $\widehat{\mathrm{tr}}\mathrm{j}$ である。

舌上音は2等直音韻にも含まれる。古い韻書など「舌音類隔切」がふえ，舌上，舌頭の反切は混同する。経籍異文で両者の区別のないことは，銭大昕の「古無舌上音」の論文により既に数の百年前に論証せられた。諧声系統や広韻両読例でも，両者の関係が殊に近い。故に */c/＋ 弛み要素→/cr/ と併行して，*/t/＋ 弛み要素→/$\widehat{\mathrm{tr}}$/ とするのは，当然の結論である。例，

∘朝 */tɔg/→/tʳɛw/→/$\widehat{\mathrm{tr}}$ɛw/ （肴韻）

2等韻は直音であるから，多少とも拗音的な $\widehat{\mathrm{tr}}\mathrm{j}$ をここに予想することは許されない。故に中古の舌上音も正確には二類ある（反切で知徹澄娘4母で一括したのは，莊初牀疏のばあいと同じ）。

2等韻… $\widehat{\mathrm{tr}}$, $\widehat{\mathrm{thr}}$, $\widehat{\mathrm{tɦr}}$, $\widehat{\mathrm{nr}}$

3等韻… $\widehat{\mathrm{tr}}\mathrm{j}$, $\widehat{\mathrm{thr}}\mathrm{j}$, $\widehat{\mathrm{tɦr}}\mathrm{j}$, $\widehat{\mathrm{nr}}\mathrm{j}$

中世には，$\widehat{\mathrm{tr}}$ 類～$\widehat{\mathrm{cr}}$ 類は合流し，$\widehat{\mathrm{tr}}\mathrm{j}$～$\widehat{\mathrm{cr}}\mathrm{j}$ 類は合流する。

（所謂る知照，徹穿，澄牀の混同）

中	古→唐末→古官話		近代官話
$\widehat{\mathrm{cr}}$ 莊（歯上）	→ $\widehat{\mathrm{cr}}$	$\widehat{\mathrm{cr}}$	$\widehat{\mathrm{cr}}$
$\widehat{\mathrm{cr}}\mathrm{j}$ 莊（歯上）	→ $\widehat{\mathrm{cr}}$		
$\widehat{\mathrm{tr}}$ 知（舌上）	→ $\widehat{\mathrm{tr}}$		
$\widehat{\mathrm{tr}}\mathrm{j}$ 却（舌上）	→ $\widehat{\mathrm{tr}}\mathrm{j}$	$\widehat{\mathrm{cr}}\mathrm{j}$	
$\widehat{\mathrm{cj}}$ 照（正歯）	→ $\widehat{\mathrm{cr}}\mathrm{j}$		

此の中間段階を反映するのが漢音で，なお舌上音をタ行，歯上正歯音をサ行で訳する。

以上の解釈によれば，近似した次の字音を，音韻的に明白に書き分けることができる。

肴韻 (2) 嘲 /$\widehat{\mathrm{tr}}$ɛw/

宵韻 (3) 朝 /$\widehat{\mathrm{tr}}$jɛw/

夬韻 (2) 嘓 /$\widehat{\text{sr}}$ɛj/

祭韻 (3) 嚌 /$\widehat{\text{sr}}$jɛj/

(4) 舌面音

北京語の解釈に準じると，次の表ができる。

歯頭音 /c , ch , cɦ , s/ 及 /邪/

舌面音 /$\widehat{\text{c}}$j照 $\widehat{\text{ch}}$j咳 $\widehat{\text{ch}}$j神 $\widehat{\text{s}}$j審/ 及 /禪/ /j/ 喩
(正歯音)

欄外にはみ出た邪〔Z〕と禪〔ʑ〕は，夫々心及び審に有声マサツの加わつたものとみれば，

心〔S〕: 邪〔Z〕→/s/ : /sɦ/

審〔ɕ〕: 禪〔ʑ〕→/$\widehat{\text{sj}}$/ .. /$\widehat{\text{sɦ}}$j/

と解釈できる。S. Martin 氏の解釈がそれで，中古漢語の音系としては，一応筋が通る（一次的解釈）。

然るに少しく考えると，これだけでは余りに皮相であることが判る。即ち

歯頭音 { /c ch ch s/ 外に /邪/

歯上音 { /$\widehat{\text{cr}}$ $\widehat{\text{cɦr}}$ $\widehat{\text{chr}}$ $\widehat{\text{sr}}$/
　　　 { /$\widehat{\text{crj}}$ $\widehat{\text{cɦrj}}$ $\widehat{\text{chrj}}$ $\widehat{\text{srj}}$/

の系列では，明に邪がはみ出る。次に中古の邪母は，なぜか4等拗音にしか出ない。(外に4等拗音だけに出る声母には喩/j/がある。) ここに二次的解釈が必要となる。さて，

	/c	ch	cɦ	s/	邪	/$\widehat{\text{crj}}$	$\widehat{\text{chrj}}$	$\widehat{\text{cɦrj}}$	$\widehat{\text{srj}}$/	○
陽韻 3	/	/	/	/	/	荘	創	牀	霜	/
4	将	鏘	牆	襄	詳	/	/	/	/	/

系列において，/c/ 組 : /$\widehat{\text{crj}}$/ 組は「補い合う分布」を示す。然るに邪に対する相手が見付からない。$\widehat{\text{srj}}$ は〔ʃ〕であり，〔ʃ〕に対する濁音は〔ʒ〕であつて，〔ʒ〕は音韻的には /$\widehat{\text{rj}}$/ で示されうる。(第二節中原音韻の項参照) 然らば，

清		濁
心〔s〕/s/	:	邪〔z〕/?/
疏〔ʃ〕/$\widehat{\text{srj}}$/	:	○〔ʒ〕/$\widehat{\text{rj}}$/

という関係が成立する。比例式を作ると，

/sj/ : /邪j/ = /$\widehat{\text{sr}}$j : $\widehat{\text{rj}}$/ 内項を入れかえて，

/sj/ : /$\widehat{\text{srj}}$/ = 邪j : /$\widehat{\text{rj}}$/

となる。$\widehat{\text{srj}}$ の最初の成分が /s/ に当るから，$\widehat{\text{rj}}$ の最初の成分 /r/ も邪に該当する筈である。而も邪は常に /j/ の前（4等拗音）だけに現れるから，邪＝/rj/ である。元来

/r/ の特色素 { そり舌，舌尖音
　　　　　 { 有声音，マサツ音

の中から，/j/ の前でそり舌要素だけが弱まるとすれば，残余の特色素を備えるのは正に〔z〕である。既に邪＝/rj/ と解釈すれば，これに伴つて禪〔ʑ〕も二次的解釈をうけねばならぬ，禪は /j/ に舌面的な有声マサツ要素の加わつたもの，即ち /$\widehat{\text{ɦj}}$/ と解釈できる。これに伴い，審もまた /j/ に舌面的な無声マサツ要素の加わつたもの，即ち /$\widehat{\text{hj}}$/ と解釈される。されば舌面音は第一次の解釈の如く歯頭音の allophone とみて4行式に解釈せず3行式に解釈することが可能となる。

I	II	III	外に鼻音
[$\widehat{\text{cj}}$ 照	$\widehat{\text{chj}}$ 穿	$\widehat{\text{chj}}$ 神	$\widehat{\text{nj}}$（又 $\widehat{\text{nɦj}}$）日
	$\widehat{\text{hj}}$ 審	$\widehat{\text{ɦj}}$ 禪	
		j 喩	

これを舌頭音の系列，即ち

I	II	III	外に鼻音
/t/	/th/	/tɦ/	/n/

の3行式と対応させると，重大な暗示をうける。即ち中古の正歯音が経籍異文では舌頭音と入れ替ることは，夙に清朝の銭大昕が「古歯音（正歯音）多為舌音」論文で論証した。また諧声系統と広韻両読の頻度率からいつても（詳細は省略）

/t/	/th/	/tɦ/	/n/
↓	↓	↓	↓
〔照	穿	神	日
	審	禪	
		喩	

の関係が最も密接であり，却つて歯頭音 /c/ 類とは全然関係がない。よつて音韻史的に論ずれば，上古の舌頭音から中古の舌上，正歯が生じる。

	*t	*th	*tɦ	*n
3等/rj～/	$\widehat{\text{trj}}$ 知	$\widehat{\text{thrj}}$ 徹	$\widehat{\text{tɦrj}}$ 澄	$\widehat{\text{nrj}}$ 娘
4等/j～/	*/tj/→/$\widehat{\text{cj}}$/照	*/thj/→ /$\widehat{\text{chj}}$/穿 ↓ /$\widehat{\text{hj}}$/審	*/tɦj/→ /$\widehat{\text{cɦj}}$/神 ↓ $\widehat{\text{ɦj}}$ 禪 ↓ j 喩	*/nj/→/$\widehat{\text{nj}}$/日

わが上代の借音中の止〔ト〕，苫〔トマ〕などについて，

*/tjəg/→/$\widehat{\text{cj}}$əj/　（照母）

*/thjəm/→/$\widehat{\text{hj}}$əm/　（審母）

の如き変化を考えると，サ行に訳せずタ行に訳したのは，上古漢語の反映であることが明かになると思う。

(5) 牙喉音

匣：喩：于は「補い合う分布」を示すから，同一音韻 /ɦ/ の allophone である。

		匣	于	喩		
直	1 等	○	×	×	故に	匣＝/ɦ/
	2 等	○	×	×		于＝/ɦr/ /hrj/
	仮4等	○	×	×		喩＝/ɦj/
拗	3 等	×	○	×		
	4 等	×	×	○		

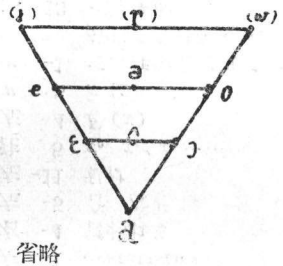
以上邪＝/rj/，禪＝/$\widehat{\text{ɦj}}$/，喩＝/ɦj/ とすれば，この三者は /j/ の variphone と考えてよい。切韻の読書音は，漢魏六朝の経師の読音（師読）の伝承されたものを集成したのであるから，色々な方言異音を含むのは当然である。現に四県客家語や越南漢語の如く，喩母字を〔Z-〕に発音する方言も現存している。（例，越南，）陽〔zjaŋ〕，油〔zü等〕），第一節で述べた如く，半母音の語頭に露出する形は，後起的な現象で，/j, w, r/ のうち，/j/ が最も早く声母

となつたが，中古の初期には純粋な /j/ でなく，多少とも子音的マサツを伴つたと思う。わが国の「特殊かなづかい」の中に，喩母字をヂ，ジで訳した例があるが，それは以上の事情に基くものである。

第五節　上古漢語の音系

紙面がない上に，国語学には上古音系との関聯が少ないから主母音と声母表を示すに止めておく。

I　主母音

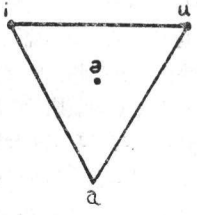


II　韻母　省略

III　声母

唇　音	/*p͡w	*ph͡w	*pɦ͡w		*m͡w/
舌頭音	/*t	*th	*tɦ	*l	*n/
歯頭音	/*c	*ch	*cɦ	*s	/
牙　音	/*k	*kh	*kɦ		*ŋ/
喉　音	/*ʔ	*h	*ɦ		/

なお2等直音の「弛み要素」や，3,4等拗音の介母 /r, rj, j/等は，上古の複声母（pl, tl, cl, kl, hl等）の /l/ の変化せるものと考えられることを附記しておく。

——東京大学講師——

本図は29頁第一節平京官話の項に挿入すべきものである。